

特集テーマの設定について

平 沢 茂

文教大学教育学部教授（同教育研究所所長）

Introduction to Feature Articles

HIRASAWA SHIGERU

(Head of Institute of Educational Research)

前首相は、『教育勅語』にノスタルジーをお持ちで、同時に戦後の教育と教師に嫌悪感をお持ちであったのだろう。「美しい国」「教育再生」を旗印にした。その流れから、与党の圧倒的多数という状況の中で、「教育基本法」改定が強行された。「国を愛する」という権力者の大好きな言葉が、若干の文言修正はあったものの、趣旨を違えずに盛り込まれた。

前首相が教育「再生」と言う言葉を持ち出すのは、教育が「壊滅」状態であるとの認識あつてのことである。「壊滅させた第一の責任者は教師だ」、前首相の思考はそこに向かい、教員免許更新制がこれまたいとも簡単に国会を通過した。この人はよほど教師に不信感をお持ちのようである。

医師、弁護士、検事、裁判官、一般の公務員、警察官の不祥事は昔からあつたし、今もある。全く同様に、確かに問題の教師は昔からいたし、今もいる。どのような集団にも、責任感・倫理観の欠如した人間がほぼ一定の割合で存在する。いや、これらの集団より遙かに多い割合で不祥事を起こす集団がある。政治家である。

にもかかわらず、教員免許更新制の導入は、教師だけを標的にした。責めを負うべき職務の真ん中に職を投げ出す某国の前首相が、この導入に踏み切った。悪い冗談もほどほどにして欲しいものだ。しかし、ことは成就してしまった。

本号では、こうした状況を踏まえて、「教員免許制度」および「教師の仕事」に焦点を当てることとした。その際、理論的な考察とともに、教師自身にも、自らの仕事について語ってもらおうと考えた。特集を2つ設定するのは初めての試みである。

1. 特集Ⅰ「教員免許制度を考える」

特集Ⅰでは、教員免許更新制を考えることとした。ただし、更新制のみをテーマにすると、賛否のみで深まりがなくなるおそれがある。そこで、教員免許制度を幅広くとらえ直すこととした。

専門的な研究を踏まえた議論を喚起するため、外部の研究者の協力が不可欠であった。上越教育大学教授・西穰司氏は、教師研究の第一人者であつて、特集の冒頭で幅広く我が国の教員免許制度についておまとめいただいた。玉川大学教授・高橋靖直氏には、比較教育学の視点で、特に

アメリカ合衆国における教員免許制度について論じていただいた。アジア諸国の教員免許制度については、同じ比較教育学の視点で、**本学准教授・本研究所研究部主任・手嶋将博氏**にご登場願った。最後に教員免許更新制度そのものに関する論議を、**専修大学教授・嶺井正也氏**に依頼した。嶺井氏は、今回の教員免許更新制度導入の国会論議において、専門的な立場で意見陳述している。

いずれも、ご多忙の中を本紀要のために時間を割いてくださった。おかげで、重みのある特集になったと自負している。感謝に堪えない。

2. 特集Ⅱ「現代の学校と教師の仕事」

特集Ⅱは、理論的な考察というより、むしろ教師自身に自らの職責について、語ってもらう趣旨で設定した。教師達がいかにまっとうで、まじめに職務に励んでいるか、それを知ってもらうことは必要不可欠のことだと考えたのである。

特集Ⅰと同様、この特集でも、本学の卒業生にとどまらず、他大学卒業の教師に執筆のご協力をいただいた。本学卒業の教員には、「教師の仕事；苦しみと喜び」というテーマの座談会で、自らの実践や学校の現状を語っていただいた。**本学准教授・教育研究所修部主任・米津光治氏**に司会をお願いし、20歳代～50歳代の各年代に属する4名の先生方（**鷺宮町立砂原小学校教諭・泉水佐代子／越谷市立桜井小学校教諭・名取宏修／野田市立関宿中学校教諭・稲橋光男／狛江市教育委員会指導室長・小宮山郁子**）にご出席願った。稲橋氏は現在教務主任、小宮山氏はすでに校長経験者である。

続いて、小学校、中学校、高等学校の教師に、すばらしい学習指導の実践を紹介してもらった。いずれも、私自身がよく知る実践で、第一級の事例である。

足立区立江北小学校教諭の栗原光子氏は、小学校低学年の生活科で、生物の名前を教える授業に力を注いでいる。雑草という草はない、全ての草に名前があるというスタンスでの指導は、子どもたちに「言葉」の重要性を意識させ、生命の重さをも実感させている。

八潮市立八幡中学校の川上泉教諭の社会科（歴史的分野）の授業は、常に、歴史を身近に感じ取らせる工夫に満ちあふれている。

埼玉県立春日部東高等学校教頭・関根均氏は、教頭の激務の傍ら、自由研究における研究方法のテキストづくりと実際の指導に力を注いでいる。

こうした実践を見て、学校教育の要である学習指導に命をかける教師の姿を感じ取らない者はいないはずである。

続いて学校経営の立場から、家庭・保護者との関連で小学校・中学校における生徒指導の課題をまとめてもらった。巷間言われるように、保護者とどう向き合うかは、現在の学校教育・学校経営上の大きな問題である。**品川区立第二延山小学校校長・宮下和子氏**は、実力派の校長で、前任校でも、現任校でも大きな実績を上げている。中学校に関しては本学の前出、米津光治氏が自らの経験に基づいてお書きくださった。

最後に、事務的な仕事に追われつつ、本務としての教育指導に取り組む教師の実態を、私自身が書かせていただくこととした。ひとえに、教師の応援歌を歌いたくてたまらなかったためである。

特集テーマ設定の趣旨をお酌み取りいただき、各論考等を味読していただけることを切に願うものである。